

いのちの祭り ……クリスマスにいのちを思う……

クリスマスはキリスト教の祭りの一つですが、何の祭りかというところ、いのちの祭りであるといつてよいと思います。人は自分の生まれた日、命が与えられた日を覚え、今日まで健康に生きてこられた事を感謝して誕生日を祝います。クリスマスのこの日、私どもはベツレヘムに生まれたイエスのいのちが自分の中に生まれたこと、そしてそのいのちに日々生かされて生き得ることを感謝して、イエスの降誕を祝うのです。

毎日、多くの子供たちのいのちを見つめ、これを守り育てることに献身しておられる皆様方と共に、いのちを考え、いのちを思うことも、あるいはいのちの祭りの日クリスマスにふさわしいかと考えて、このような題でお話することにしました。

先日テレビの番組で“脳死”というのを見ました。医療の現場からの報告を見て、医療技術のめざましい発達に驚くとともに、脳死の認定とそれに伴う臓器移植が私どもの伝統的生命観を揺るがしかねない深刻な問題であることをあらためて認識させられたことでした。

今日は、もちろん、この時代の先端を行く生命観ではなく、古い古い書物である聖書の持つ生命観の一端をお話したいと思います。



新約聖書には“いのち”をあらわす語がいくつもありますがここにとりあげるのは“プシケー”という語で、新約聖書中に100回余の用例があります。皆様よくご存知の *psychology*（心理学）の語源です。1954年改訳では“いのち”をはじめ、“心、精神、魂、霊、靈魂”などという訳語が当てられています。英語ならば、*LIFE* のほかは *SOUL* が最適の訳語でしょう。もちろん、このギリシア語は新約聖書記者の造語ではなく、彼らがヘレニズム世界から借りてきたもので、本来“命の息”を意味し、人が生きている間その体に活気を与え、死ぬとそこから立ち去っていく“いのちの原理”を言うものであるとされます。旧約聖書の人間創造の説話で、神が土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れると、人は生きた者となった”（創世記2：7）と

ありますが、旧約聖書のギリシア語訳である七十人訳によりますと、これは“プシケーへと生きるようになった”とあります。すなわちプシケーの存在となった、“人”となったということです。人は“からだ”と、知情意の座である“心”との複合体であって、そこに各自固有の人格と、各々独自のパーソナリティ（性格）があります。スーターという学者は、プシケーという語は現代人の言う“SELF”（自己）に最も近いと言っております。

聖書はこの語を使って、いのちの意味を開示しています。その中から2点を取りあげて、いのちの性質、いのちの法則を考えてみたいと思います。



まずマルコによる福音書8章35－37節を読みます。『自分の命を救おうと思うものはそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。』

ここに4回出てくる“命”はすべてプシケーです。イエスはここで弟子たちと一般群衆に向かって、心をこめて自分の命、自分のプシケーを大切にせよと勧めています。たとえ全世界を自分のものとしても、自分のプシケー（SELF、自分自身）を失ったら何にもならない、一度失った“自分”はどんな代価を払ってもとり戻すことは出来ないのだからと。人にとって何よりも大切なものは自分自身です。いのちの尊厳はそこからこそ始まるのです。

最近、大平健という精神科医の書いた『豊かさの精神病理』（岩波新書）という本を読みました。このイエスの言葉の巧まざる説明のように思えました。著者によると、モノのあふれる豊かな社会にあって、自分をその心身両面にわたってモノ化している人々は、人づきあいにおいても、モノを仲介とし、あるいはヒトをモノのように扱うことによって生の感情の衝突を避けようとする。当然のことながら、人間の関係は淡いものとなり、豊かな生々とした人間関係は失われてしまう、というのです。そこには、飽食と金余りで全世界をもうけながら、自分…これが人間だという、人間の中心というべき自己を喪失してしまった人間の何とも寂しい姿が浮かんでくるではありませんか。自己喪失者は

著者の言葉を借りると、“生の感情の衝突を避けようとする”と言うのですが聖書によれば、プシケーはあるいは“そそのかされ”（使徒行伝 14：2）、あるいは“乱され”（同 15：24）、あるいは“誘惑され”（第二ペテロ 2：14）、あるいは“肉の欲に戦いをいどまれる”（第一ペテロ 2：11）。イエスでさえもその“心（プシケー）が騒ぐ”（ヨハネ 12：27）とされています。プシケーに生きる者、しっかりと自己を保持している者は、生の感情の衝突を避けることなく、葛藤し、戦い、傷つきながらも活々と生きていくのです。いのちの躍動とはそういうものでしょう。だからこそイエスは弟子たちに、あなたのプシケー（“精神”と訳されている、マルコ 12：30）のすべてをもって神を愛せよと命じられたのでした。

イエスの言葉に合わせて、私の好きな詩を二つ読むことにします。一つは日本の先駆的プロテスタント・クリスチャンのひとりである内村鑑三の『Our Baby』という英詩です。（全 5 節のうち、3 節を私訳）

“われらの幼な子” 小さな、かわいい子 / わが家のうれしい客 / 静かで、無口で、泣かない幼な子 / めったに笑わないが、笑うときの / ああ、何というすばらしさ！

われらの幼な子 / しかしわれらのものではない / かの女は、かの女で一個の人格 / 無限のみなもとより来り / 測り知れない深さを、その眼にやどす / 永遠の価値を示すしるし。

われらはみなかの女をかわいがる / しかしまた客として尊敬する / われらのもとに宿る見知らぬ天使 / われらの手にゆだねられた幼な子 / 聖子が、ガリラヤの家庭で / ヨセフとマリヤの手にゆだねられたように。

もう一つは、パレスチナ人で英語で詩を書いたハリール・ジブランという人の“子供について”という詩です。

（親に向かって言う）

あなたがたの子どもたちは

あなたがたのものではない。
彼らは生命そのものの
あこがれの息子や娘である。
彼らはあなたがたを通してうまれてくるけれども
あなたがたから生じたものではない、
彼らはあなたがたと共にあるけれども
あなたがたの所有物ではない。
あなたがたは彼らに愛情を与えうるが
あなたがたの考えを与えることはできない、
なぜなら彼らは自分自身の考えを持っているから。
あなたがたは彼らのからだを宿すことはできるが、
彼らの魂を宿すことはできない。
なぜなら彼らの魂は明日の家に住んでおり、
あなたがたはその家を夢にさえ訪れられないから。
あなたがたは彼らのようになろうと努めうるが、
彼らに自分のようにならせようとしてはならない。
なぜなら生命はうしろへ退くことはなく
いつまでも昨日のところに
うろうろ ぐずぐず してはいないのだ。

(以下略、神谷美恵子訳)

いずれの詩にも“一個の人格”“魂”(プシケー、S o u l)の尊厳と、“無限のみなもと”“生命そのもの”への畏敬の念があふれています。アルベルト・シュワイツァーのことばで言えば“生への畏敬”です。そしていずれの詩も、親に子供への態度を教える教訓詩ですが、それを道徳的なお説教ではなく、いのちの法則によって促しているところが素晴らしいと思います。

“いのちの法則”…それは、いのちは決して“うしろへ退くことはない”ということ、プシケーはつねに“明日の家に住んでいる”ということです。現代は一種の宗教ブームの時代ですが、そのブームの宗教に群がる多くの若者たちが、いまの生活がうまくいかないのは前世のせいだと思いこんでいると言います。そこに占いや手相などがはやる理由もあるのでしょう。しかし自分の負う

人生の苦しみ、不幸、障害の『なぜ』を問うのみで、その“意味と目的”を問うことをしない“因果応報の思想”（前世の悪行の報いとして現在の不幸があると考える考え方）は、未来志向のいのちの法則に反するではありませんか。因果の鎖を断ち切って、誰のいのちとも代えられない、この自分のいのち（プシケー）によって生きる。それがいのちの法則に従って生きる生き方ではありませんか。イエスは生まれつきの盲人を見て、この人が生まれつき盲目なのは彼の罪でも親の罪によるものでもなく、“ただ神のみわざが彼の上に現われるためである”と言われました。（ヨハネ 9：1～3 参照）これがイエスの解放であり、彼の与える自由のいのちです。クリスマスは、この力強いいのちをことほぐ祭りです



この決して失ってはならないプシケー、人を人たらしめている、この人にとって最も貴重なプシケーを私どもはしっかり守らなければなりません。聖書は勧めています。プシケーを殺すことのできない者を恐れず、体もプシケーも共に殺すことのできる方をこそ恐れよ（マタイ 10：28）、信仰によってプシケーを保ち（ヘブル人への手紙 10：39）、プシケーをきよめ（第一ペテロ 1：22）プシケーを救え（同 1：9）、と。

しかしながら、新約聖書の言うところによれば、プシケーはプシケー自身を救うことは出来ないのです。いのちはいのち自身を救いえない、これがもう一つのいのちの法則です。救い主イエスが自分を救うことができなかつた（マタイ 27：42）ことに似ています。先に引用したマルコ福音書 8章 35節には人は自分のいのちをわがものとしようとすればするほど、それを失いやすいとあります。イエスはご自分について“父は、わたしが自分の命を捨てるから、わたしを愛して下さるのである”（ヨハネ 10：17）、さらに自分の使命は人に仕えること、多くの人のあがないとして自分の命を与えることにある（マルコ 10：45）と言われました。そして私どもには“自分の命までも捨てなければ”彼の弟子になることはできないと教えておられます（ルカ 14：36）。これが“いのち”の厳しい自己規定です。

新約聖書には、従って他者のために自分の命を投げ出すべきことを教える言

葉がたくさんあります。その代表というべきものが、イエスの“告別の辞”の中にある次の言葉でしょう。“私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。人がその友のために自分の命（プシケー）を捨てること、これよりも大きな愛はない。”（ヨハネ 15：12～13）いのちは、他者のために自分のいのちを捨てることによってのみ生きる。“命を捨てるのはそれを再び得るため”（ヨハネ 10：17）だからです。プシケーはこのようにしてのみ成育するのです。先にちょっと言及したシュワイツァーの『生への畏敬の倫理』は、『自己完成の倫理』と『献身の倫理』とから成り立っていますが、この二つの倫理は言うまでもなく、互いに矛盾、対立する二極です。しかし、いのちの法則が、この二極を美しい一つの調和へと導くのです。他者への献身のみが自己のプシケーを完成せしめる…これが生への畏敬の倫理でありましょう。イエスはこうも言われました。“自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ”。（ルカ 10：27）

ここで、この有名な言葉について、言わずもがなのことを一言付け加えておきます。この言葉は、そうした誤解がなければ幸いですが、何か英雄的行為を示唆し、その為には人はこれを単なる美辞、あるいは非現実的な理想主義の教えととりやすいのではないのでしょうか。それは一つには、この“いのち”を即物的にあるがままの自然的生とのみと捉えてしまうことにあるのではないかと思えます。しかし、この“いのち”を文字通りプシケー、あるいは S E L F という訳語で読んでみると、全く別の側面が見えてくるように思われます。話が非日常的、事件的な事柄から、もっと平凡な日常なことになります。利己的で自己中心的な人間が、その自己を他人（友）へ向け、他人を思い、他人のためにできることをする…それが愛であり、それがいのちの法則なのです。互いに戦い、競うのではなく、互いに“その生命の一端を人々に献げる”（シュワイツァー）ことにこそ、人が共に生きることの意味があり、生きることの幸福があります。

ここで、最初のクリスマスに伴って生起した不思議な事件を思い起しておきたいと思えます。聖書の伝えるところによれば、イエス誕生の折、時のユダヤの王ヘロデはイエスの“いのち（プシケー）をねらって”（マタイ 2：20）、その遂行のために“ベツレヘムとその付近の地方にいる二歳以下の男子をことごとく殺した”（同 16）と言います。もちろん、この凄惨な虐殺事件の責任

者は、晩年次から次へと近親者を殺し自らも狂死したと伝えられるヘロデ王ですが、神はなぜイエスの誕生という喜ぶべき生の祝福の折に、この生の抹殺という悲しむべき事件の生起を許されたのでしょうか。不可解というしかありません。ただ一つだけ私に推測しうる理由があるとすれば、それは“いのち”にはシュワイツァーのいう“いのちの罪責”というべきものがあって、およそ“いのち”はすべてこの“いのちの罪責”を負っているということを示しているのではないかということです。

一つの個体のいのちは、それが生きるために多くの個体のいのちを犠牲にします。他の多くのいのちに支えられて、このいのちは在ります。その罪責を絶えず覚え、その罪責をしっかりと負っていきるのが、まさにプシケーのいのちです。イエスはこのことを次のように言われました。“一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。自分の命（プシケー）を愛するものはそれを失い、この世で自分の命（プシケー）を憎む者は、それを保って永遠の命（ゾエー）に至るであろう。”（ヨハネ 12：24～25）

一昨年亡くなった韓国の国民的思想家で民主化運動の指導者であった咸錫憲という人に長篇叙事詩『朽ちゆく大木』というのがあります。いまのイエスの言葉のすぐれた注解だと思しますので、ここにその結語の部分だけをご紹介します。

腐ろう！

棟梁の材木として選ばれ、王宮と聖殿の梁になり柱となるよりは腐ろう。

そこで姦巧で汚い者たちの目障りな醜態（ざま）を見て心を腐らすよりは、この晴々と生气溢れる生命の殿堂で閑暇（のどか）に横になって腐るがよい。

そこで外側は美しい丹青を塗っても、中ではしみがつき、みみっちい鼠どもの昼夜を分たずかじりつくのに、心痛極まることどもをしでかされていて、一夜愚かな子供等の争いの果てに燃えさかる火焰に焼けて、煙と去り行くよりは、この谷間に腐って、あの幼児達を肥え太らせよう！

肥料（こやし）になろう！

解体（とか）れてしまおう！

生命の海に還ろう！

腐ろう、

棟梁の材木よ！

腐ろう、偉大なる魂よ！

腐ろう、だまって横になって腐ろう。草むらの中で、土の底で、謙遜に勇敢に腐ろう！

腐って去り行こう、人知れず去り行こう！

(曹亨均訳)

一粒のむぎが実を結ぶためには必ず死ななければならない。個体（SELF）は死ぬべき有限な存在である。しかし、いのち（全体、ゾエー、ヨハネ 3：16）は死ぬことはない。だからこそ“いのち”であり、死はいのちに吞まれてしまう。仏教のたとえによれば、一滴の水は流れに入るとき最早一滴であることをやめるが、その水は悠久の大河となって流れることをやめない。自ら腐り、朽ちゆく大木は“自分の生命を憎む”ゆえに、“生命の海に還って行く”。自分のプシケーを他者に献げる者は、“それを保って、永遠の命に至るであろう”。これがいのちの法則であり、いのちの賛歌であり、それこそこのごろしきりに言われる『地球にやさしい』、本当の意味での幸福な生き方でありましょう。

○

最後にもう一つ有名なイエスの言葉を引いて、話を終わることにします。“すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだったものであるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるだろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。”（マタイ 11：28～30）

この“魂”はプシケーです。プシケーに休みが与えられる、いのちに休みが与えられる…これこそ平和であり、自由であり、解放です。祭りとは解放であり、その喜びであれば、クリスマス（キリストの祭り）こそは、その“大きな喜び”（ルカ 2：10）をよろこぶ、人のいのちの祭りであると信じます。

1990年12月25日、あるキリスト教主義保育園の職員研修会で語ったもの。